A-Lab Talk vol.1

アートの発信基地とまちの関係

出　演　　天野　太郎、原　久子
日　時　　平成27年10月31日(土)／午後2時～午後4時
場　所　　あまらぶアートラボ(A-Lab room1)

横浜市民ギャラリーあざみ野主席学芸員
天野　太郎 Taro Amano
北海道立近代美術館を経て、開設準備室より横浜美術館へ。国内外での数々の展覧会企画に携わる。
横浜トリエンナーレ2005キュレーター、2011、2014キュレトリアル・ヘッド。多摩美術大学、城西国際大学、国士舘大学非常勤講師を務める。

大阪電気通信大学教授
原　久子 Hisako Hara
京都造形芸術大学勤務を経て1997 年よりフリーのアートプロデューサー、ライターとして活動。関西を拠点に国内外で現代アート、映像、メディアアート等の執筆、展覧会・ワークショップ企画など行なう。

「地域」と「アート」

原　久子さん（以下　「原」）　まずは天野さんに、横浜の状況について伺いたいのですが。

天野　太郎さん（以下　「天野」）　私が直接関わっているのは横浜が多いのですが、横浜だけでなく、今は日本全国で、北は北海道、南は九州まで、「地域」と「アート」がセットになって語られるようになっています。それはおそらく、2000 年代に入ってから。私は 1990 年代から、もう 20 年以上、横浜美術館で展覧会を担当してきましたが、2000 年頃までは、そのふたつの言葉がセットになって世の中にでてきたというのを聞いたことがありません。私はひたすら美術館で展覧会の企画をして、乱暴に言えばそれでおしまい。地域をどうするこうするなんて話は、美術館ではプログラムになかったし、美術館に来た人に対してのプログラムはあったけれど、こちらから出向いてどうこうなんて聞いたことがないですね。

私の本来の職業は美術館の学芸員。2008 年の横浜の話をします。横浜は、海側がみなとみらいや美術館がある新しいエリアだが、その反対側に、日の出町という、非常に古い下町、ダウンタウンがある。横浜の典型的な下町だが、その一角に黄金町という名前のエリアがあり、そこに 2008 年、黄金町エリアマネージメントセンターという NPO ができました。出資元は横浜市で、このエリアの再生が目的。

これはものすごく明確な目的がある事業で、このエリアはかつて、買春、売春、麻薬で有名だった所。私のような人間でもなかなか足を踏み込むのは恐ろしかったです。昼間から女の人がずっと立っているような所。駅でいうと、京浜急行の日の出町駅から黄金町駅までの、そんなに遠くない駅と駅の間の高架下周辺に、当時280軒近い買春売春のエリアがあり、そこを浄化していこうという計画でした。警察と地域住民、自治体とが一体で取り組みました。

その場所で 2008 年、NPO が立ち上がり、何か町の再生ができないだろうかということで、私が美術館から呼ばれた。それから始まったのが黄金町バザール。買春、売春していた場所をほぼ全部アーティストのスタジオにするか、レジデンス、住んでなおかつスタジオにするというようにリノベーションしました。今年も 50 人くらいのアーティストが、国内外から来訪し、レジデンスをしています。黄金町バザールに参加し、10 月から一カ月間をここで過ごす。これで終わって帰る人もいますが、その後何年も住み込んで制作する作家もいます。

2008 年に私が関わって、NPO のディレクターをしている山野真悟さんという、博多の天神でアートユニットを長年やってきた人と組んでやっていくとき、最初に二人で相談したのは、まずはアートという言葉を使わないということ。アート、アーティストと言うと、どうしても仲間内で何かやっている自己完結的なイメージがあるので、まずそれは避けよう、と。あとは、経済的な意味でも人が来てお金を落としていく流れが必要。美術館のように展覧会をして、会期が終わったらおしまいで、後は寂しい町になってしまうというのでは意味がありません。興行的に何かのショップだとかそれ以外のファションだとかを持ってきて、商業的に美術に特化しないでなんとか人に来てもらう、という最初の試みでした。

ここでの作品をいくつかご紹介します（場内には画像が紹介される）。ここに桜花川という川があって、右手に行くと横浜の港に繋がっていく。これは本間純というアーティストの「そして川が流れる」という作品。川面に、橋の下にぶら下がっているもののシルエットが映っています。この町のいくつかの外形をシルエットにしたものを、外でインスタレーションする。ただ部屋の中で作品を見て帰っていくのではなく、なるべくまちを使うようなことができるアーティストを選んでます。

これは、買春、売春が行われていた狭い部屋。その狭い空間を使って作品を制作しました。かつてここがどういう場所であったか、という記憶が必要だと考えています。まちの人にとってはいまさら買春、売春なんていう言葉を使ってほしくはないが、一方で記憶を残し

ていくことは必要だから。これは三宅一生さんのショップ。ほとんど荒廃したまちでしたので、三宅さんに相談して、期間限定でも良いので店を出してほしいと頼んだら、二つ返事で OK。本人も見に来てくれました。

黄金町と聞くと思い出す映画があります。黒沢明の「天国と地獄」。舞台になったのが黄金町で、実際にこのエリアの看板などが映画に出てきます。昭和 30 年代が舞台の映画で、当時すでにかなり危ないまちになっていました。映画の中でも、通りに薬物中毒の人がたむろしているシーンが出てきます。黒沢さんもこの場所でロケをしたかったけど、あまりにも危なくてできなかった。三宅さんも、黄金町と聞くと黒沢さんを思い出すとのこと。

この当時、コムデギャルソンの川久保さんなどが、ありえない場所でテンポラルなショップを作っていくというプロジェクトをヨーロッパでやっていて、三宅さんもそれに興味があり、お願いして、ここで店を出してもらいました。結構売れて、月の売り上げが 60 万円以上。ここに絶対来ないような、青山や原宿でショッピングしているような人たちが三宅さんの服を見にやってきました。単に展覧会をして作品を観てもらうという、美術館と同じことをしてもここでは意味がない。新しい何か、美術だけではないことにも取り組みました。

これは志村信裕という作家の作品。「赤い靴」をテーマにした映像作品。赤い靴は横浜というか「港」というイメージがあります。これを映像で、上からプロジェクターで写す。この通りは街灯がなく、夜には真っ暗になるので彼の作品を置きました。彼の作品は昼間見えないが、夜になるとそれが可視化されるというもの。加えて、映像なので作品の周辺が明るくなり、見に来る人もいるので、寂しい通りがなくなると考えました。志村さんはここで滞在し、制作していたアーティストだったが、ここで認められて卒業し、現在は活動の幅を広げています。

クリス・チョン・チャンフィ、 マレーシアの映像作家。彼はまさに黒沢明の「天国と地獄」のオマージュを、このまちを使って行いました。映画のシーンをモチーフにして、地域の人たちや滞在しているアーティストたちを出演者にして、面白い映像を作りました。サイトスペシフィック・アートという、この土地の記憶を使って映像化した作品。アジアから来た作家などは、この土地のバックグラウンドがわからないので、調査をしたり、話をしたりする中でこういう作品が生まれてきます。場所の記憶を掘り起こしてくれる人たち。展示に使われている部屋は、かつて買春、売春で使われていた部屋、その空間が残っているところで作品を展示します。

これは志村さんの別の作品。この近くにかつて呉服屋さんがあり、地域の年配の方はよく覚えています。その呉服屋さんの家で見つけた布を映像にして、その生地を川で洗っているような、水につけて水面がでるような作品を作りました。先ほどの桜花川で、染色した生地を洗っているようなイメージで、地域の人が、呉服屋さんがあった記憶を感知してくれる作品にしました。

これはアジアの作家のもの。もう一度新しいまちとして再生していくことをイメージした作品。屋外に展示しており、ちょうどこの作品の上を京急が走っています。今は、この高架下に集会所、展示室、陶芸や簡単なワークショップができる新しい施設ができてますが、来年に向けて高架下の施設はもっと拡張していきます。横浜市の予算だけでは足りないので、京急にも入ってもらっています。京急としても、駅の安全を管理する使命があり、京急がマネージメントしている商業施設等の企業にも参画してもらっています。

原　私は、天野さんのように実際に地域と関わるようなプロジェクトを担当したことはなく、鑑賞者側の視点でライターあるいは編集者として観に行くことが多いです。一方で、数年前から、地域とアートにフォーカスしたプロジェクトに対する助成申請の選考に関わっています。

地域とアートに関係するプロジェクトは国内事例も多く、年々増加傾向にあります。皆さんも耳にしたことがあるような、「大地の芸術祭越後妻有トリエンナーレ」、「瀬戸内国際芸術祭」のようなメジャーなものだけではなく、地域の人たちが手作りで、継続的にやられているような芸術祭やアートプロジェクトも増えてきています。予算規模の内容も様々なものがあり、毎回多くの申請があります。地域とアートというキーワードにまつわる色々な動向があります。

関西の事例を紹介すれば、大阪市内の NPO が運営する「釜ヶ崎芸術大学」という、詩人の上田假奈代さん等によるプロジェクトがあります。芸術大学というネーミングもユニークで、表現活動として素晴らしいものです。やっている人たちはじつは「芸術です」と構えてはいないし、運営側もそれを押し付けない。

ほかには、西成区を本拠地としている「ブレーカープロジェクト」は 2003 年からもう 13 年も続いています。阪堺電車の駅舎と車両をアーティストがペイントしたことも過去にありました。現在は、使われなくなった集合住宅を使ってプロジェクトを行なったり、元タンス屋さんを使って「kioku 手芸館たんす」というスペースを運営したりしています。お母さんたちの手仕事である手芸の延長といった内容にみえますが、プロジェクトを主導するアーティストとのやりとりが素晴らしい。一見すると誰もがやっている編み物や縫い物だが、お母さんたちが普段意識していなかった文脈でそれらを読み替えてみることも可能です。そこに参加する人にも意味を持たせ、違う価値を付けていく。それによって参加する人たちも違う視点を持ち始めています。

最近、パラモデル（2人組アートユニットの名称）の中野裕介さんが、その集合住宅の中に部屋を設けました。造形的にその場を改修したり、作品を置くということに留まらず、滞在する時間によって外から入る光の変化を体験するなど奥が深い。完成までのプロセスを語るいわゆるアーティストトークを行なった時も、お母さんたちが作ったおはぎや甘いものが出されました。これまで接点がなかった人たちが出会い、若いアーティスト達のやっていることに興味を示し、耳を傾け始めています。

天野　太郎さん

黄金町の事例を天野さんに聞き、初めて訪れたときはまだ準備段階の頃でした。警官が辻々に立っていて驚いたが、いまではかなり周辺の雰囲気も変わり、多くの人が訪れる場所となりました。

こうしたプロジェクトでは、まちの外からいろんな人たちがやって来るが、まちの人たちは、最初は「なんかやっているな」という感じです。ブレーカープロジェクトや釜ヶ崎芸術大学も、始まった頃は、この人たち何をやっているのだろう、という見え方だったかもしれません。それが 10 年以上経って、やっと地域の人たちのものになってきました。アートは即効性のある特効薬ではなく、じわじわゆっくりと人や地域に浸透するところがあります。

地域の外から来た人と昔から住んでいる人では、同じ言語をしゃべっていても別の解釈をしたり、色々な齟齬が起きたりします。付き合いが長くなっていく中で、同じ価値観にはならないとしても、そのギャップを自分の中である程度理解しながら見ることができるようになります。

アートがまちに来ることで地域の課題がいきなり解決する、という幻想は、実際やっている人たちは抱いていません。

美術館が直面している課題

天野　美術館でずっと仕事をしている立場でいうと、どうして地域とアートが一緒になってしまったのだろうとい

うのが一つあります。黄金町の場合はきわめて特殊な事業。地域の人も、解決しなければならない当面の課題というと、まずは自分の家計であり、それ以上の問題を当面の問題と捉えるのはなかなか難しい。一方で日本が相当極端な高齢社会に入ってきたというのは否めない事実。横浜の場合は人口が390万人で、あと10年以内に人口の3分の1を退職者が占める。タックスを払わない人が3分の1になり、医療費は上がります。日本はこの状態に完全にシフトしたもっとも早い国です。

今年ヨーロッパを周って美術館の関係者と話したとき、すごくみなさんが知っているような美術館でもいよいよ作品を買うお金がゼロになっています。にもかかわらず、新しい美術館を建てようとしている。オランダのロッテルダムのボイマンス美術館、ヨーロッパ屈指の美術館の館長の話。2017年に向けて全四層の新しいビルを建てていて、総面積がだいたい6000㎡、ここにどうやって収蔵品を集めるかというと、まずはヨーロッパだけでなく世界中のコレクターに声を掛けて寄贈してもらいます。あとは、ロングローンといって、美術館が作品を預かる形にするということ。美術館に預けると空調がきいた非常にいいのコンディションのところで、無料で預かってもらえます。美術館はそれを使って展覧会ができます。よって美術館と利害関係が一致する。三つ目は、作品は持っているけれど、美術館にあげたくもないし、預けたくもないけど自分のすばらしいコレクションを人々に見せたいという人もたくさんいますので、ちゃんとその方用のプログラムを組んでいます。学芸員をつけてキュレーションさせてカタログ編集して、もちろんきれいな展示をします。そして、美術館がすごいお金を取ります。

原　久子さん

美術館はそういう手法に完全にシフトしています。高齢化の問題はヨーロッパも例外ではないので、美術館の運営方法は、まったく違うフェーズに入ってきました。

2011年、2014年に横浜トリエンナーレをやったとき、ロンドンのテートモダン、ニューヨーク近代美術館、サンフランシスコ近代美術館など名だたる美術館の学芸員が、10人くらいのコレクターを連れて、作家の作品を紹介するツアーをしました。学芸員は解説することが仕事だが、コレクターは作品の解説を聞きたいということではなく、どれが買えるのか、いくらかということが目的。実際にテートモダンは、アジアの作家に興味のあるコレクターを連れて来て、日本人、東アジア、東南アジアの作家の作品を紹介して回り、画廊か作家自身と話をさせ、小切手を切ってその場で買わせ、テートモダンに寄贈してもらっています。経済的に鈍化しているため、そういった手法で作品を収集します。昔のように公的資金でやっていた時代ではなくなっていました。パブリックリソースがどんどん減っていく。このままでは、ゴミはもっとお金をかけないと回収してくれなくなる世界になるかもしれません。そのようなことに、すごくリンクしているテーマなのではないでしょうか。

のんきにアートで地域おこしをやろうか、と言っている場合ではありません。何かそこで生まれてくること自体がセーフティネットになっていく、という仕掛けがどこかにないと、美術って面白いというだけでは継続性、サステナビリティがない。今や美術館も大慌てで、今まで見向きもしなかった地域用のプログラムを作ったりしています。

原　Yahoo !ニュースなどでご存知だと思うが、尼崎市出身の具体美術協会で活躍された白髪一雄さんの作品が、オークションで、7億円で落札されたということもあります。具体は元永定正さんも含めて、作品の値段が非常に上がっています。美術関係者でない方は、私たちが当たり前のように美術館の購入費ゼロだよね、といっている話を「そうなの?」と聞いておられるかもしれない。豊富な予算を持っているところもごく一部ありますが、日本の美術館では購入費がほとんどつかない状態が、かなり長い間続いています。

天野　美術館という名前がつくと、もれなくコレクションをしなければいけないのか。東京の国立新美術館を知ってますか。

原　国立新美術館は、美術館とは言っているが、英語名称はミュージアムではありませんね。

天野　よくプレートをみると漢字では国立新美術館、でも下にはニューナショナルアートセンターと書いてある。アートセンターはコレクションしない。ドイツでクンストフェアラインといって、ミュージアムではない。コレクション持ってないにもかかわらず、国立新美術館は美術館という名前をつけています。

自分の家の近所に、有名な作品を持つ美術館があるというのは悪い話ではないし、一生に一回くらい美術館にいって「へー」と思うのも悪いことではない。だが、地域とアートをくっつけなければならない理由は、黙っていても自治体が何かしてくれたという時代が終わったということに。それは住民も美術館も同じということ。ヨーロッパの美術館は、お金がないから諦めるのではなくて、今度は個人コレクターにシフトして次の手を考えています。日本の美術館は次の手をなにも考えていません。なければないで何もしない。

公的ないろんなサービスが潤沢にあった時代が終わると、自分のことは自分でやらなければならなりません。自分のまちが汚くなったら自分たちで何とかしなければなりません。空き家が出たらほっとかないで自分たちでなんとかしようというような時代。それにたまたま、アートが使われているだけ。他のものでも構わないかもしれない。そのリアリティはあります。

アートに求められる役割

原　アートは善とは言わないが悪でもないと一般的に考えられています。ほかのことをやるより問題は起こらないのではないかと感じている人たちがいるから、それを使っていこうということになります。

天野　悪くはない、美術って。

原　例えば1993年にイェルバ・ブエナ・センター・フォー・ジ・アーツがアメリカのサンフランシスコにできました。この地域は非常に多様な民族が居住し貧困が蔓延していました。その人たちは普段は美術に興味があるとかないとか以前に、アメリカに住んでいるのに英語が話せないなどいろんな背景を持っている人たちで、その人たちを結びつけるメディアひとつのがアートだと考えられていました。英語はまだできなくても、自分たちのアイデンティティに対してきちんと誇りを持つ。それぞれの持っている背景をお互いが理解できるようなプログラムを作ったり、それを造形していったり。そういうことを通して、センターができる前から地域の理解を得ようと活動し、計画から設立まで時間と手間がかけられました。オーストラリアの美術館での取り組み事例では、オーストラリアも移民国家なので、ボランティアの人たちが美術館で、自分たちの国の言語で作品を紹介するプログラムがあります。アートの専門家ではない一般の人がアンバサダーとして、自分たちの国の言葉、地域について紹介する機会がありました。「美術」という日本語は、“美しい術”と書いてしまうので、昔は美しいものでなくてはいけないというように思われていたと思います。美術は、歴史や民族、世の中のさまざまな問題を考えたりするときなどに、パラソフィア : 京都国際現代芸術祭がそうであったように、問題提起するのに適した手段です。そういうことを考えるのに、アートと地域という形でやっていくのは良いと思います。

残念だと思うケースは、楽しいことをやっていれば子どもたちが喜ぶだろうとか、そういうふうに地域とアートを使われてしまうと、本当にそこにお金をかけるのが、

良いことなのかどうか疑問に思うことがあります。

天野　私がこれまで手掛けてきたのは、まずは美術館の仕事。それからトリエンナーレという規模の大きい国際展、そして地域。国際展で言うと、この近くには神戸ビエンナーレがあり、関東では、茨城県全域で開催する国際展が始まります。つい２日前、茨城で出展するフィンランドの作家に会いました。調査に来たと言っていました。茨城は広く、山もあれば海もあり、広域での展開が可能。今後、こうしたアートの取り組みが仙台でも始まるかもしれません。埼玉でも始まります。なぜこんなに各地で始まっているかというと、観光資源にしたいと考えているから。

世界中の観光客を世界中で争奪しています。札幌の国際芸術祭もそう。今、ひとつの国でこんなに国際展をやっているというのは、聞いたことがありません。「トリエンナーレ」「美術館」「地域」という、この３つはそれぞれ全く違う性格のもの。美術館が国際展をやっている例は、横浜と愛知。福岡のアジア美術館もやっているが、規模からいうと横浜が一番典型的。こうした取り組みの中でけっこう齟齬が起きてきています。国際展をやるのと美術館の仕事とは似て非なるもの。そして地域になってくると、原さんが繰り返しおっしゃっているように、美術に特化しないようにしないといけません。ただ美術館の学芸員の立場からすると、良い言葉ではないけれど、質の高いものしか相手にしたくない。なんでもいいわけではなく、美術館で取り扱うものは歴史的に残っていくもの、というスタンスでやっています。一方で、地域になってくるとある程度面白そうなもの、子どもが楽しそうなものも取り込んでいかなければなりません。さらにトリエンナーレになってくると、国際的にも評価を受けたい、文化庁がお金を出すから、海外の作家の人数は何人以上にしてくれないと困るというようなこともあります。まったく違う３つの属性の異なることを束ねると長所と短所がいろいろできてきています。前述の通り、観光客の問題はばかになりません。世界中で年間に海外旅行に行く人の数が約 10 億人。70 億の人口に対して、だいたい 10%強。その観光客の争奪戦が始まっています。５年くらい前に、ルーブル美術館が日本でワークショップをしたときに彼らが言っていたのは、年間に一千万人の来場者を目標にしているということ。何が何でも一千万人入れます。特に日本人の観光客を獲得していきたいと考えており、パンフレットも、変な日本語が含まれていたりせず、きちんとしたものを作りたいと、本気で作成しました。そのキャンペーンの時には、広報のスタッフだけでも 200 人を雇って PR し、実際に一回だけ 1000 万人を超えました。今はだいたい 900 万人ちょっとくらい。国が、地域も含めて停滞しているし、今後、爆発的に右肩上がりにならない時代に、どう維持してくか。そのような中で地域ということを考えたときに、住民がなにを思っているかというすり合わせをしていかないと難しい。

黄金町がどうなったかというと、2008 年から黄金町バザールをやってきたことで、いわゆるジェントリフィケーションという現象が起きている。これは、疲弊していた場所にみんなが集まるようになることで、いい店ができ、地価が上がり、活気が生まれるということ。ただ、地価が上がった結果、家賃が上がり、今まで住んでいた人が住みづらくなる、という現象も起きています。また、これまで買春、売春が可視化されていたものが、不可視化し始めています。具体的には、反社会的組織の人間が、ほぼ誘拐のような状態で連れてきた人たちを借金漬けにしてマンションに住ませて、そこで住民として客を取らせます。そこに警察が踏み込んでも、友達だといわれるとこれ以上何もできない。取り締まるとまた新しいことをし始めるというイタチごっこ。

私は美術の世界に生きているが、この「美術」という言葉の意味が、文字通りの意味とは違うものを相手にすることもあります。「これが美術です」といえる分かりやすい美術ならば安心だが、地域の中で考えたときに、アートをどういう風に考えていったらよいかは難しい。例えば、六甲ミーツ・アートのようなことをしたときに、必ず専門家は、すごく面白い作品はあったけど、全体的に作品の質はどうだろうかという言い方をします。原さんはどう思われますか、美術に質を求めるということと、みんなが楽しんだらいいという乖離を感じませんか。

原　基本的に、出会いというのはすごく大事だと思っています。質の低いものに最初に会ってしまうと、アートってやっぱり面白くない、よくわからないというような感じになります。だが、良いものに出会えば、理解はできないけど何か面白いかもしれない、というように、どんどん前のめりになっていくという傾向があります。作品の質も、みんなが楽しむことも、両方を担保するのは難しい。運営面でも予算の面でも、非常に質の高いものを持ってこられるアーティストがそんなにたくさんいるのかといえば。結果、いつも同じような人たちが参加しているということが起こっています。その人たちに負荷がかかり過ぎれば、その人たちはすごく良い作家であるにもかかわらず「こんな作品をここで出してきてしまって」という評価になってしまうことにもなりかねない。そういうことも実際に起こっています。これだけ多くの芸術祭が日本国中にあると、その質の担保が難しい。それに、来場者の問題もあります。例えば尼崎市民が全員は来なくても良いと思います。音楽に興味がある人もいれば、ダンスに興味がある人もいるわけなので、美術に特化する必要もない。兵庫県内でも龍野、六甲山、西宮船坂など多くのアートプロジェクトや芸術祭が開催されています。みんな一生懸命全力を尽くして良いものをしようと思ってやっていても、来場者の確保の問題もあります。地域とアートと芸術祭、といって多くのイベントが開催されていくなかで、やっている側も疲弊して、作っている人たちも疲弊して、見る人たちもお金を多く使わなければならない、という状況になっていって、楽しいはずの遠足が…というようなことにもなりかねない。

天野　今日の会場にも、美術の学校を出て、アーティストとして活動している方がいるかもしれませんが、それこそ 20 年前には、美術の大学を出ても何の保証もない、担保もない中、社会に送り出されて、頑張ってねといわれました。ところが今、地域とアートの時代になって、とにかく来て欲しい、うちの村でも町でも、そして結構安く住めるよ、作品も作れるよ、たまに子どものワークショップしてくれて、地域住民としても頑張って、というような、いくつかの条件をクリアすると、悪くない条件で住めるところが増えています。アーティストにとってはある種のセーフティネットになっていて、生活のためにバイトに追われるのではなく、地方で、家賃が高くても３万くらいで広いところを借りられて、作品が作れて、地域住民としての役割も少し果たして、といったスタイルが生まれています。例えば黄金町では、秋の祭りのときは、レジデンスしている全作家が参加するが、特に海外から来た作家は、祭りが珍しいから熱心にやったりします。それもアーティストとしての違うベースができて悪くないなと思う。ただ７年も経つと、いつまでもその場所に居て、いつまでも出て行かないアーティストが出てきて、地域住民からのプレッシャーを掛けらています。いつになったら天野さんの横浜の美術館の展覧会に呼ばれるのとか、プレッシャーがかかっているのは良い話。

そんな状況になっていて、地域とアートがうまくいくのかは別にして、地域に若い人が来てくれる。そういうことが日本の中で今起きていることは間違いない。

トリエンナーレでも、美術館でも、地域でも、本当はものすごく良いものがあったほうがよい。白髪さんの話で、なんか知らないおじさんが絵を描いているらしいと思っているのが近所の人の声だとすると、それが、作品に７億円の値が付くと聞くと、結構驚く話。人間はお金に換算すると、改めて違う価値付けが始まるので。

JRや阪神尼崎の駅で降りたときに、ここが何のまちかは全くわかりません。そのまちに行ったときに、本気でうちはこのまちです、といえるようなものが必要。近松門左衛門とか、白髪一雄を生んだまちとか。そういったブランディングが必要で、実際に歴史的に残っている良いものがあるのだから、子どもたちに徹底的にいい

ものを見せておかないといけない。アーティストが若くて、キャリアがなくても、しかるべき作品を作れるような人たち、ここのスペースが、尼崎がそういうようなところをどうも狙っているというのを見せると、割とあっという間に広がるので、質は問いませんではなくて、相当質にこだわるんだという姿勢は必要だと思います。

発信基地になるために

原　今回のトークは 3 回のシリーズの 1 回目。まちとアートという大きなテーマのもとに、「アートの発信基地とまちの関係」というお題があるので、ここからは尼崎の話をしましょう。天野さんはこの場所に A-Lab のような施設ができるということで、どのような期待をされますか。下に保育所があって、隣が中学校、高校も近く、というロケーション。阪神尼崎駅からほぼ 15 分。

天野　学校帰りの子どもたちは普通来ない。クラブ帰りで疲れて早く家に帰りたいので。いわゆるアーティストといわれる人と付き合って思ったのは、基本的に“ダメ人間”が多いということですね。

原　この場所は、まだ何をやるのかわからない。ただ、出来て 1 年経ってもまだ何かわからないままでは困る。何らかのキャラクター付けが必要ではないだろうか。尼崎は多様な人々を受け入れているまちだと思うが。

天野　アーティストは“ダメ”な人が多い。しかし、美術に出会うことで救われる方がいます。こんなことをしていてもいいんだと思うことができます。横浜は労働人口が減っていて、海外からの移民が増えています。私が乗るバスは、朝、乗客の 3 分の 1 はインド人。これからは自分のコミュニティだけでなく、異文化と触れていかなければいけません。そういったときに、例えばこの場所がいろんな国の人が集まれるような場所になればいい。高齢化だけでなく異文化を受け入れる中で必要になってくる。

原　尼崎市には外国人が1.1万人いる。多様な民族が集まる特徴のある場所にすべきということでしょうか?

天野　無理やりではなく、チャンスと捉えるべき。現状の風景が変わる可能性がある。

尼崎在住の方で、貴重な文化財を多く所有しているリサーチ系の作家さんが多いので、掘り起こしてみるのも面白い。友政麻理子さんという方が、自主映画の制作と映画祭のプロジェクトを行っていて、自分はそのメイキングに携わっている。老若男女が参加でき、それぞれ自分のためになる。出来上がった作品が上映されるので、大変面白かった。

このようなプロジェクトを実施するには、キャラの立った専門家が 1 人は必要。アイデアが出せて小回りが利いて、アーティストと話が出来る人。新しいことに取り組める人。そこに委譲していかないと回っていかない。

原　施設があるだけでは機能しませんから、コーディネート機能というか、市民とアートをつなぐ人材が必要。また、まちをアーティストが掘り起こしていく形なら、高価な作品をコレクションしなくてもいい。よそのギャラリーとは違うことをしていくのがいい。リサーチをするときに、まったく関係のないものを取り入れてみるのも面白いかもしれません。

天野　アーティストが、自分と全く違う分野で成果を挙げている人とコラボレーションしたり、プロジェクト型でこの地域が入って来たりすることは面白い。市民が何かに関わっていかないと点が線、面になっていきません。尼崎を知らない、日本を知らないアーティストを呼んできて、プロジェクト型の展開をしていくときに、住まいがないアーティストをホームステイさせてくれる人がいるかもしれません。直接作品に関わることがなくても、当事者となることで、ここに来てくれる人が増えます。来てくれるか来てくれないかは仕掛けの問題。鑑賞者だけでなく、当事者となれるプログラムを入れていかないといけません。

原　ここが発信基地となっていくためには、当事者というキーワードが重要。11 年前、六本木クロッシングに参加した作家の 1 人は、地域のリサーチをする中で、老人が集まる場所に話をしにいきました。そのときに話を聞いてくれた方が六本木の森美術館まで作品を見に来てくれました。聞いてくれた方は六本木ヒルズに興味はなかったが、アーティストの作品に興味を持ち、見に来てくれました。この場所がアートセンターになるのではなく、「アートを通した・・・」と言う場所になって欲しい。「ラボ」という名前がついているので実験場として何をしてもいいと思います。

天野　やり方には同じものはない。気をつけることは、自分たちがやっていることが他の人にどれだけ広がっているかということ。どこかで参加させることが大事。市民が当事者となり、アーティストを応援できるようになればしめたもの。まずは足下を知るというプロジェクトはどうか。自分の住んでいる町のことを実際はあまり知らなかったりします。

原　逆に意外なことを知っている、というコアなところが集まってくると面白い。今日来てくださった方は、新しいところが出来ると期待してくれている方でしょう。今後は、アウトリーチが必要。Facebook や twitter は自分の似た興味の人しかつながらない。これを駆使したところで限界があります。どう対外的に発信していくかがポイント。何か新しいやり方はないでしょうか。

天野　コンテンツが面白くなると食いつきがいい。なかなか難しい話ですが。お客さんだった人が、その立場からお客さんを呼ぶ立場にシフトしていくような仕掛け作りが必要。来てくださいと告知をするのでは、チラシの印刷代がもったいないくらいで、やっぱり関っていくことが必要。アーティストとしては、部分的にしか関わってない人が、結果どうなるんだろうと思ったときに作品として提示することが役割。参加するメンバーをなるべく変えていきます。

原　アート関係の場所に行くと、東京でも大阪でも、いつも同じようなメンバーしかいません。税金を投じているわけなので、年代も個性も幅広い人に集まってもらいたい。色んな人が、色んなチャンネルを持っています。そのような方に自分も何か関われると思ってもらえることが大事。

天野　神戸や京都にあるアート施設は“顔”があります。若手のキュレーター等にある程度の裁量を任せていくと育っていくのではないでしょうか。

原　若い人にもいろいろな企画をしている人がおり、キュレーターとして期待できる人がいます。そういった人も関わってもらえれば良い。せっかく設置された場なので、政権が変わったらぜんぜん違う場所になるといったような迷走することだけは避けるべき。

天野　雇用の問題もあります。英語が喋れて描けてという、良い人材を採ろうとしない。雇用契約ではなく委託契約にして、プロジェクトごとに解散している。日本全体でジェネラリストは優遇するけどスペシャリストは優遇しない傾向。若い人を 5 年 10 年と継続して雇用することで継続性が保たれていく。若い人が拠点とすることができるようなインフラになることも大切。

原　日本の美術館やアートセンターは外国人を雇用しようとしません。外国人で日本に興味を持ってくれるアーティストやキュレーターもいるので、非常勤でもいいから雇用することがあってもいいのでは。

天野　外国人を採用することは何度かチャレンジしたが、外国人は書類が作れません。外国では外国のメンバーと仕事ができているので日本でもできるはず。海外の人が作成することを前提とした書類にすればよいのですが。国際的なメンバーで仕事をしていないのは日本だけで韓国も台湾も行っている。アーティストのほうが、世界を回って、情報を持って移動しています。

ここの話に戻すと、場所が持っている歴史性やアーカイブを利用すること。自分の住んでいるところがいいと思えるとモチベーションがあがります。

原　実際担当しているのもシティプロモーションの部署。地域の人の、自分の町に対するシビックプライド（都市に対する誇りや愛着）を絡めて考えていくと、方向性がいくつも考えられます。おっしゃられたようなプロジェクトを 1 つずつ進めていくことで、若い人が集まる場所、チャレンジしていく場所、発信していく場所など、この場所のあり方として提案できそうです。